

## 2022 北海道レフェリーアカデミー第7回(通算17回) 事業報告

報告: 山口麗弥(札幌)

【日 時】 2022年10月29日(土)、11月3日(木)

【場 所】 オンライン(ZOOM)、札幌サッカーアミューズメントパーク

【参加者】 審 判 員: 一瀬哲平、山口麗弥、濱岡優太(3日のみ)、岡聖人(3日のみ)

インストラクター: 古曾部統太郎氏(RAM)、岡田渉氏(RAI)

オブザーバー: 山崎裕彦氏(RDO)、堀悠雅氏、田口平蔵氏、高橋海星氏(強化指定審判員)

講 師: 合同会社友歩 上前拓也様

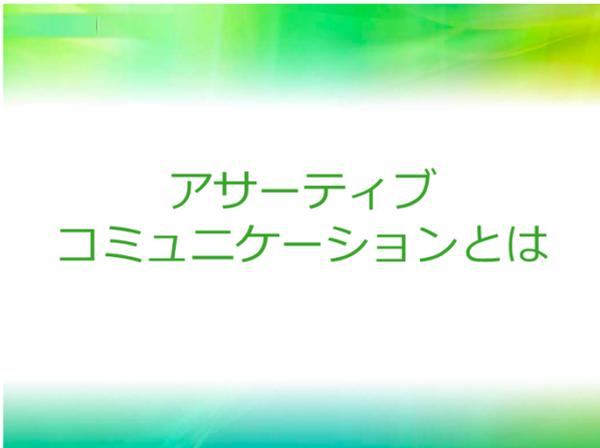
### 【研修内容】

テーマ: 「アカデミー修了後を見据えて」

#### 10月29日(土)

09:55 集合 @オンライン(ZOOM)

10:00 講義「相手を不快にさせない伝え方&感情のコントロール」 講師: 合同会社友歩 上前様



## アサーティブ コミュニケーションとは

本講義では、相手を不快にさせない伝え方と感情のコントロールを学んだが、審判としての選手との試合中のコミュニケーションに限らず、審判仲間同士でのコミュニケーションや RAC 修了後に社会人になる上でのコミュニケーションにも通用するスキルを学ぶことが出来た。

### ▶相手を深いにさせない伝え方

アサーティブコミュニケーションとは、自分の意見を飲み込むことで我慢したり、一方的に自分の主張を押し通したりせずに、相手を尊重しながら自分の意見や感情を伝えるコミュニケーション

のことである。本講義では、自らのコミュニケーションの傾向を調べた。その後、肯定的に伝えることやI(私)メッセージで伝えることなど、アサーティブに伝えるポイントを学んだ。

### ▶感情のコントロール

アサーティブに伝えようとする場面でしばしば問題になるのが、怒りの感情である。怒りという感情は、急に湧いてくるものではなく、日々溜まっていくネガティブな感情(=第一感情)が許容量を超えてしまった際に生まれる第二感情である。この怒りの感情を制御するには、第一感情の時点で溜め込まないことや相手に対する「こうあるべき」ということの許容範囲を広げること、行動しても変えられないことは放っておくことなどの方策がある。

また、イライラした状態が続くと、アサーティブなコミュニケーションは困難になるため、仲間全体で傾聴し合える環境を作ることも必要である。

11:30 昼食・移動 @札幌サッカーアミューズメントパーク屋内競技場

15:00 Physical check 「YO-YO + speed Test」

10mのスプリントテストと YO-YO テストを用いてフィジカルチェックを行った。4 月の結果を超えることが出来た者もいたが、同じの結果となった者もいた。両名ともに4月からほぼ横ばいの結果となり、フィジカルでの目標「超えろ」を達成出来たとは、言い難い結果となった。今回のテーマにあるように RAC 修了後も継続してトレーニングに臨むことの重要性を再認識した。

10m sprint 平均:1.74 秒 YO-YO Test 平均 : 66.5 本



17:00 諸連絡・解散

11月3日(木)

08:15 集合

10:00 試合実践①

高円宮杯 JFA U-18 サッカープリンスリーグ 2022 北海道 プレーオフ

札幌光星高等学校 - 帯広北高等学校

主審:山口 副審1:岡 担当:

<自己分析>

この試合で大きな課題が生じた事象は、前半 40 分の PK 前の接触だと思う。

そのシーンでは、守備側競技者(帯広)が遅れて相手競技者(光星)に向かってスライディングタックルしており、ファウルが妥当であった。そもそも私の予測は帯広が先にボールに触れることであった。結果的に先にボールに触れたのは光星、ファウルは帯広と見当が外れたことや PA 内外の判断などが重なり、判断に迷いが生じてしまった。

直後に光星の PK があつたため、試合は荒れずに済んだが、間違いなく荒れる原因になり得るものだった。様々な可能性を考慮したポジショニングや思考を意識したいところだった。

<INS 分析>

1 試合を通して的確な判定基準であった。また前半 38 分の KI も期待される判断であり、レフェリーの判定を尊重できるものであった。ただし、自身の分析通り、PK 前の接触はアドバンテージの適用、もしくは、すぐに判断し、直接 FK で再開されるのが望ましい。レフェリーサイドの PA 角付近は、誰かにサポートをもらえる位置ではない事も認識し、十分な感性が必要であることをこれからの糧にしてほしい。



## 13:00 試合実践②

高円宮杯 JFA U-18 サッカープリンスリーグ 2022 北海道 プレーオフ

北照高等学校 - 酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校

主審:一瀬 副審1:濱岡 担当:



### <自己分析>

課題となるのは、バイタルエリア付近におけるポジショニングである。特に、9分,45分,82分,88分では攻撃機会を邪魔している可能性は否めない。原因としては、レフェリーサイドにしっかりと入る事ができず、アシスタントサイドから開こうとする動きをしているからである。また、バイタルエリアでのポジション修正のタイミングが不適切であり、選手の動きを阻害していた。改善点として、レフェリーサイドから中に幅を寄せていくこと、パスの出るタイミングを

予測するべく状況把握できるポジションに位置することに努めたい。今一度、正しい判定をするためのポジショニングの改善を図りたい。

### <INS 分析>

私のメモには 5 分~24 分まで、動きとポジショニングにおける6個の？または×がありました。それは、この試合における判定に影響してはませんが、「基本」とは何か、「基本」を意識した結果の「応用」なのか、疑問に感じたからです。その「基本」とは、「対角線式審判法」であるはずです。

また、それとは別に 56 分ゴールキーパーのパンチキックを邪魔した事象について、監視のためのアングル・バックステップも改善してください。監視するため、判定・判断するための動きとポジショニングです。“手段であり、目的ではない”まさにその通りです。

15:00 試合振り返り

16:10 諸連絡・解散